

# 植物園協会ニュース

「ふるさとの植物を守ろう」

Japan Association of Botanical Gardens  
公益社団法人 日本植物園協会

## SNSでつながる植物園

(公財)豊橋みどりの協会(豊橋総合動植物公園)丸山 貴代  
新潟県立植物園 林 寛子 東南植物楽園 仲井間 歩  
渋谷区ふれあい植物センター 宮内 元子 とちぎ花センター 永島 安紀  
(情報提供:茨城県植物園・岡山市半田山植物園)

SNSを用いた植物園間の連携として、2019年12月から開始している「共通ハッシュタグ」(例: #植物園のつながり など)の使用に加え、コロナ禍において行動の自粛が全国的に求められた4月からInstagram上で「植物しりとり」を開始しました。「植物しりとり」は私たちにとって親しみのある“言葉あそび”で、「植物の持つ魅力」で見ると人の落ち込んだ気持ちを少しでも和らげること、「植物園には多くの植物があると知ってもらうこと」を目的とした企画です(図)。

のんほいパーク植物園の発案で新潟県立植物園、渋谷区ふれあい植物センターと始めたこの企画は11月現在、参加園が10園、投稿数は100を超えた人気のコンテンツとなりつつあります。

植物しりとりのルールは、①1日に最大で1つの園が投稿、②植物名は和名・学名・ご当地の呼び名いずれでも可能、③投稿が難しい場合パス制度を利用する、④つなぐ先の園名をメンション(※1)する、⑤指定する3つのハッシュタグ(※2)をつける、という5つです。

- ※1: 投稿文章中に「@ユーザー名」を記載すると、そのユーザーのプロフィール画面まで移動できる機能
- ※2: #植物しりとり, #植物園のつながり, #植物園のOO

「SNS上でつながった植物園」をフォロワーがどのように捉えるのか調べるため、のんほいパーク植物園のInstagramアカウントを基準にSNS上でのそれぞれ連携状況が異なり、フォロワー数が比較的近い植物園アカウントで対照比較を行いました。結果は表1のとおりです。

また、同様のコンテンツを利用する園で、参加方法や時期の違いによる差を調べるため、開始当初から「植物しりとり」と「共通ハッシュタグ」に通常投稿を多く用いて参加している渋谷区ふれあい植物センター、当初から「植物しりとり」と「共通ハッシュタグ」を主にストーリー投稿(※3)で参加している東南植物楽園、「植物しりとり」が通常投稿として展開され



図. 地域性のでた植物しりとりのやりとり(一部抜粋).

表 1. 連携の違いが与える共通フォロワー数の比較.

	新潟県立植物園	茨城県植物園	岡山市半田山植物園
アカウント名	@niigatabotanicalgarden	@ibashokubutu	@botanical_garden_handa
植物しりとり	○	×	×
共通ハッシュタグ	○	○	×
のんほいパーク植物園との共通フォロワー数	88	59	30
のんほいパーク植物園の共通フォロワー割合	15%	10%	5%

表 2. 参加方法や時期の違いが与える共通フォロワー数の比較.

	渋谷区ふれあい植物センター	東南植物楽園	とちぎ花センター
アカウント名	@fureai_botanical_garden	@southeast_botanical_gardens	@tochi_hana
植物しりとり	○	○※	○
共通ハッシュタグ	○	○※	○
のんほいパーク植物園との共通フォロワー数	81	52	51
のんほいパーク植物園の共通フォロワー割合	14%	9%	9%

※主にストーリーを用いた投稿で参加

てから参加しているとちぎ花センターと、のんほいパーク植物園の共通フォロワーを比較して、表 2 のとおり結果を得ました。

※ 3: 通常投稿より日常的な写真や動画の投稿ができる機能。投稿から 24 時間限定で投稿が消える気軽さから、利用するユーザーが多い。アーカイブとして残すことも可能。植物しりとり開始当初はこの機能を用いていた。ハッシュタグ検索で検出されない。

これらの差は、“コンテンツを用いた「つながり」が増えることで、フォロワーが「植物園という存在」を見つける機会が増えることから生じている可能性”を示唆しています。

開始当初から「植物しりとり」と「共通ハッシュタグ」の両方に参加している東南植物楽園とのんほいパーク植物園の共通フォロワーの割合が、後から両企画に参加したとちぎ花センターや、「共通ハッシュタグ」のみの協力である茨城県植物園のフォロワーの割合とあまり差が見られないのは、ハッシュタグでの検索にかからないストーリー投稿を中心に参加していたためと考えられます。

なお、岡山市半田山植物園とのんほいパーク植物園の共通フォロワーの内、約 13%は上記 2 つの比較調査に用いた全ての植物園をフォローしており、残りの 87%も岡山市半田山植物園と当園以外に表 1, 2 いずれかの植物園を 1 つ以上フォローしていることが確認できました。よって「SNS上でのつながり」を持

たない植物園同士の共通のフォロワーは「積極的に植物園アカウントをフォローする“植物園”ファン」であると考えられます。

上記の結果より、“植物園”ファンは何らかの形で多くの植物園を見つけてフォローしていること、植物園同士がSNS上でつながりを持ち「各園が独自に抱える“植物園”ファン」を全国の植物園アカウント(※ 4)に誘導できれば、それぞれの園が更なるファンを獲得できる可能性があることが示唆されます。

※ 4: 植物園協会加盟園以外も含む。

現在、「植物しりとり」を運用する中で改善すべき点を見出すべく、参加園に対しアンケートを行っています。この結果を反映させ、さらに参加しやすい仕組みを作ることでより多くの植物園の参加を促し、ファンにとって魅力的なコンテンツを目指したいと考えています。

今後も「植物しりとり」や「共通ハッシュタグ」の他、各園が取り組んでいるSNS上の連携を全国の植物園で共有・協力し、植物園ファンへの情報提供を行うとともに、市民の植物園への理解や関心を高めていきたいと考えていますので、新たな連携のご提案や「植物しりとり」「共通ハッシュタグ」の参加にご協力頂ければ幸いです。



## 植物園だより

## かつての高知の原風景を再現したい！高知県立牧野植物園のガンゼキラン大群落.....

高知県立牧野植物園 栽培技術課 藤井 聖子

高知県立牧野植物園では、園芸目的で乱獲されるなどして県内で自生を見ることが難しくなった絶滅危惧種ガンゼキラン約5,000株の群落を高知の原風景として未公開園地に再現しました。2018年（初公開）と2019年の5月下旬、各年5日間のみ限定公開にも関わらず、合計11,000人以上の方々にお越しいただきました（2020年はコロナウイルス感染拡大防止の観点から公開を中止）。

かつて、高知県四万十町志和の山中にはガンゼキランの大きな群落があったそうです。一部の土砂が流れ、崩れ落ちていた株を近隣の農家さんが保護し、半世紀以上かけて自宅のハウスで増やしていました。その後、エビネブームの訪れと共にその群落は乱獲され、消失したといえます。最近になって、農家さんがもとの自生地に植え戻そうと試みるも、イノシシが掘り返して荒らしてしまうことから、保全を目的として2012年に当園が譲り受けることになりました。

引き取りに伺った際、畝植えのガンゼキランを目の当たりにした私は、「まさに生息域外保全」と感動すると共に、牧野博士が生前「暖帯のいろいろな草木を集めて立派に園を計営し、外来の観光客などを流石がは土佐丈の

事はあると絶賞する様にしたいもんです（原文ママ）。」と語っていたことを思い出し、「さすがは土佐」と言われる群落を造ろうと決意しました。当園の公開園地は既に飽和状態で群落をつくる場所がなく、栽培職員で未公開園地の急斜面を開墾することにしました。伐開後は、風化した粘土集積土壌の改良が必要となり、20kg以上ある堆肥50袋やその他沢山の資材を人力で担ぎ降ろして土壌改良を行いました。ガンゼキランは株分けして公開園地に葉付きのバルブを植栽し、群落予定地には環境に適応した草姿になることをねらってバルブのみを植え付けました。日常業務の合間に少しずつ植栽したため、全てを植え終わるのに2年かかりました。公開園地のガンゼキランが来園者を楽しませるようになって、群落予定地は地面から半分だけ露出したバルブばかりが目立ち、不安を感じました。しかし根気よく管理を続けた結果、少しずつ私たちの期待に応えてくれ、3年目には葉が茂るまでに回復、4年目には開花するものができてきました。5年目には多くの花が開花し、公開できるレベルにまで成熟してきたので、安全に観察いただくための園路の整備や広報用の画像の撮影などを行うなど翌年の公開に向けた準備を計画的に進めました。開



6年かけて作りあげた大群落。





2018年初公開のようす。

墾から6年経過した2018年5月19日、初公開の日を迎えました。多くのメディアによる事前報道もあり、公開10分前には入口に60名ほどの列ができました。開場後、薄暗い林内は活気づき、多くの人で埋め尽くさ

れました。来園者からは「ありがとう」、「いいものを見せてもらった」、「これは高知の自慢だ」という声をお聞きしました。また、かつては「病院の裏山に群落があって、入院している人にその花を摘んで束にして持っていた」、「近所の山に群落があったが、ある日突然消えてしまった」、「山にトラックで乗り付けて乱獲されるのを見たことがある」など、かつて低山にガンゼキランが多数あったという話や、我々が知りえなかった貴重な証言を得ることができました。

花の美しい絶滅危惧種の群生で来園者の興味をひき、楽しんでいただくとともに、高知県ではこのような絶滅の危機に瀕している野生植物があることを強く発信できる絶好の機会となりました。提供いただいた農家さんも地元の宝を皆に知ってもらえて嬉しいと喜んでくださいました。今回のような観賞と生息域外保全を兼ね備えた展示を行うことで、多くの方々に他の絶滅危惧種にも関心を持っていただけるよう、今後も工夫を凝らしていきたいと思います。

## 国内最大のオーストラリアバオバブ (*Adansonia gregorii*) 導入から3年目の開花 ●●●●

広島市植物公園 堀川 大輔

2017年10月、当園の大温室のリニューアルに伴い、新たにシンボルツリーとしてオーストラリア北西部のキンバリー地方より、国内最大のオーストラリアバオバブ (*Adansonia gregorii* F.Muell.) を導入しました。翌年2018年3月から新たな葉が展開し、生育が最も盛んな夏を通して大いに枝葉が成長しました。

導入から2年目の2019年8月25日の夜、初めて開花しました。花径約15cmの白い花がほのかに甘い香りを放っていました。その後次々と、9月中旬まで計6輪開花しました(堀川ほか, 2020)。自家受粉や他園から頂いたアフリカバオバブの花粉を用いて人工授粉を試みましたが、結実しませんでした。11月頃から葉が黄変し始め、翌年1月には完全に落葉しました。

2019年同様、2020年も5月5日頃から芽が出始めましたが、梅雨の長雨が続いて日照が足りなかったせいか、展葉のスピードがゆるやかでした。それでも8月上旬に、昨年よりも多い数となる10個の蕾を確認することができました。その後、蕾は順調に生育し、8月17日の夜に今季最初の花が咲きました。開花当日の朝には蕾の長さが7-8cmになっており、蕾が割れて白い花弁部分が、さらに夕方にかけて花弁部分が突き出てきました。20時30分頃からがくが2裂して巻き始め、30分程かけて花柄部分まで巻きました。それと同時に

花弁部分が徐々に膨らみ、21時過ぎからゆっくりと花弁が開きました。22時前には花弁の開度はほぼ水平となり、その後は花弁が反り返りました。花弁は開花日の翌々日の昼頃までは白い色を保ち、その後茶色に変化しました。8月下旬~9月中旬に開花した花は、それ以前に開花した花より早い20時過ぎからがくが巻き始め、22時前には花弁の開度がほぼ水平となりました。9月下旬に開花した花は、開花当日の夜温が20℃くらいまで下がったせいか、翌朝になってもがくが巻いておらず、花弁も開ききっていませんでした。最終的に2020年



2020年8月20日21時39分撮影 2輪目。



は8月17日～9月26日までに、昨年の倍以上に上る計14輪の花が開花しました。9月上旬に催された夜間開園では、開園時間中(21時まで)に入園者の方々に途中までとはいえ開花の様子を見てもらうことができ、多くの方が感動されていました。

三重県の(株)赤塚植物園より頂いたオーストラリアオババの花粉を用いて、9月上旬に開花した翌朝の花

に人工授粉を試みましたが、残念ながら結実には至りませんでした。また来年度も試みようと思っています。今年では枝葉の生育が昨年以上に著しく良かったので、来年以降の成長、花数が楽しみです。

【参考文献】

堀川大輔, 泉川康博, 濱谷修一. 2020. 広島市植物公園栽培記録 41: 21-27



木の全体像の写真 (2020年9月26日撮影).

## 名古屋市東山植物園温室前館が開館しました

名古屋市東山植物園 谷口 茂弘

名古屋市東山植物園温室前館の補修工事と植物の移植工事が完了し、日本植物園協会第56回大会・総会の開催年と合わせて開館いたしました。この温室は、現存する日本最古の公共温室で、文部科学省から「わが国最初期の本格的鉄骨造温室建築として重要」と評価され、平成18年12月に国の重要文化財に指定され、復原を行っていました。

植物園の温室は、昭和7年に東邦ガス株式会社から25万円の寄附を受けたこと、地域の土地所有者の方から動植物園の用地を無償で提供いただいたことから建設が始まりました。東洋一の温室を目指し、温室の鉄

骨組みには、建築物としては日本で初めて電気溶接を採用しました。初代の園長には、計画段階から植物園の整備にあたった横井時綱が就任しています。そしてのちに二代目の園長となった水野耕一が、神奈川県大磯の池田成彬邸から入手したヤシの木や、戦後間もない頃、ロータリークラブを通じて米国のミズーリ植物園から贈られたパラグアイオニバスなど、珍しい熱帯植物を導入しました。水野園長の時代には、太平洋戦争の終戦、米軍による植物園の一時接收、日本植物園協会の設立、伊勢湾台風の襲来による温室の被災など、名古屋市や植物園の歴史の中でも激動の時代でした。





復原工事が完了した重要文化財温室。

東山植物園の歴史を語るときに特筆するべき園長は、この二人だけではありません。昭和12年に一般公開された温室を取り壊さずに継承することができたのは、温室の改修計画が持ち上がる中でも、五代目の石川格園長らが、植物文化を伝える遺産として改修に反対し、その後も歴代園長がこの精神を連綿と継承してきたことによるものです。

今年度、名古屋市で開催される日本植物園協会第56回大会を契機として、東山植物園の歴史を情報発信するとともに、なぜ東山植物園の温室が取り壊されずに残ってきたのか、過去の資料や昔の園長からの聞き取りなどにより、現在、講談師である旭堂鱗林さんが創作する講談に取りまとめる準備を行っています。講談の制作には、名古屋市内25ロータリークラブからの支援

を仰ぎ、実現に至りました。講談師旭堂鱗林さんの講談が、大会プログラムのひとつとして、協会関係者の皆さまの前でご披露できるよう、鋭意、準備を進めてまいりましたが、ご披露が困難な状況となりました。講談をDVDとして記録いたしますので、ご興味のある方は東山植物園までお問い合わせください。



切り石層が発見された中央ヤシ室。



植栽工事が完了した中央ヤシ室。

編集・発行 公益社団法人 日本植物園協会

〒114-0014 東京都北区田端1-15-11-201

TEL: 03-5685-1431 FAX: 03-5685-1453

URL: <http://syokubutsuen-kyokai.jp/>

E-mail: [newsletter@syokubutsuen-kyokai.jp](mailto:newsletter@syokubutsuen-kyokai.jp)



植物園、植物に関わるニュースや様々な取り組み、栽培技術、生物多様性、保全といった幅広い内容の記事を掲載します。共有したい情報やご意見等があれば、左記の協会事務局宛にお寄せください。

(編集協力：大阪市立大学附属植物園 厚井 聡)